

## 父の背中

栃木県立栃木農業高等学校 動物科学科 1年 藤沼 大志

私の小さい頃の遊び場は牛舎でした。物心がつく前から、親が目を離すとひとりで牛舎に行って遊んでいたそうです。自転車に乗れるようになると、牛の顔を見ながら自転車を乗り回し、額にハートマークのついた牛がいないかと1頭、1頭見て回っていました。そんな風に私の生活には常に牛がいることが当たり前でした。

そして、そんな変わらない日々がこれからもずっと続くと私は思っていました。小学生のとき、10日間も続いた雨により、水害を体験しました。その出来事が私にとって、家族の力になり牛飼いになりたいと思うきっかけとなりました。災害当日、祖父母はホイルローダーや軽トラックに乗り牛舎に向かいましたが、家に帰るときには水が溢れかえってきて、徒歩でしか家に帰ることができませんでした。ほとんどの牛は助かりましたが、仔牛は2・3頭が溺れてしまい助けることができませんでした。瓦礫を撤去した跡から死骸が出てきて胸が苦しくなりました。そして水害後10日間、牛乳はアルコール不安定乳になってしまい、畑に捨てなければいけない状態が続いてしまいました。牛が提供してくれている牛乳を活かすことができないと、残念な気持ちでいっぱいでした。高齢の祖父母が、大切に守ろうとしたものを「私が引き継いで守りたい、力になりたい」と一段と思うようになりました。酪農の仕事は、重労働も多いが、大好きな動物たちに囲まれ、命の誕生という牧場主しか体験できない感動的な瞬間に立ち会うことができる、私に向いた仕事です。生まれてきた命に感謝してこれからも私が大切に繋いでいきたいです。

私の家では、自給飼料としてイタリアンライグラスやデントコーン、飼料米を栽培し、粗飼料の約90%を貯っています。それらの飼料は、父が大型の重機に乗り、ロールベールに調整していきます。大型重機を自分の手足かのように操り、縦横無尽に操作し難しい作業でもさらりとこなす父の姿に小さい頃から憧れてきました。幼い頃には、その重機に乗りたいとはしゃぎ、疲れて寝てしまうまで父と一緒に乗っていました。父が積み上げたロールが我が家家のジヤングルジム、兄弟でよく登ったりかくれんぼをしたりしていました。そんな私も、今では父を助けて飼料の収穫や搾乳、飼料給与の手伝いができるようになりました。小学校高学年の頃から父の指導のもとホイルローダーやフォークリフトの乗り方を教わり、父のようになりたいと家の手伝いをしてきました。収穫期には、父が圃場からトレーラーで運んできたWCSのロールを、ホイルローダーで飼料置き場に降ろしたり、きれいに並べて管理しやすいように積み上げたりしていくことが今の私の仕事です。ホイルローダーで約800個を積み上げていきます。そして、給餌の準備としてその日に使う分のロールを運ぶ作業も任されるようになりました。重機に乗るスキルが上がることで、家族の負担が

減り、いい状態の牧草を収穫することができます。私は、1つずつできることを増やしてスキルアップしていきたいです。今の課題は、ロールに傷をつけて穴を空けないことや、ロール同士のズレをなくしきれいに積むことができるようになります。

私の家は、経産牛約60頭、育成牛約50頭の約110頭を飼育している酪農家です。仔牛の育成では、生後3・4ヶ月齢までは自宅で、約20ヶ月齢までは、岩手県の育成牧場で預かって貰っています。預託をすることでその期間の飼育の労力を減らし、飼育スペースを減らすことができます。しかし、自分で育成するよりも費用がかからってしまうことや初回授精のタイミングや判断をひとに頼らざるを得ないことが課題です。

生産牛の回転数で考えると、2産以上の経産牛、約30頭のうち分娩間隔が500日以上ある長期未受精個体は5頭、1産しかしていない牛、約15頭のうち空胎日数が160日以上ある長期未受精個体は5頭います。これらの牛の分娩間隔を短くすることができたら生産効率が上がるのではないかと考えました。若い個体では、身体を作ることと、牛乳を生産することに栄養を使ってしまい、発情が起こりにくい個体もいるそうです。また、発情を確認しにくい個体もいるようなので、発情が確実に分かる方法がないかと考えました。私の家ではつなぎ飼育をしているため、マウンティングによる判断ができず、それぞれの個体の観察が重要になってきます。

そこで私の通う栃木農業高校では、発情を確認するためどのような取り組みをしているか伺ったところ、スマート農業として、分娩・発情監視システムを現在使用しており、牛群管理システムを今年度から取り入れると教えていただきました。どちらも体温や反芻の回数等をデータ管理することから、発情や分娩時期を知らせるだけでなく、疾病などの見極めなどもでき、省力化に繋がっています。

私は、将来スマート農業を取り入れることで、反応が薄くても発情を確実に確認することができ、分娩間隔が短くなると考えました。また、現場に行かなくても牛の様子を知ることができるために、しっかりとした休日を取ることができ省力化に繋がると思います。現在、毎日朝早くから夜遅くまで働いており、なかなか休みを取ることができません。そんな環境でも、父は弱音を吐くことなく、黙々と作業しています。だからこそ私は、スマート農業について高校で学び、どの機材やシステムが私の家に合っているかを検証していくたいです。

そして将来、自分で酪農を経営していくうえで、大学に進学した後、酪農ヘルパーをしたいと考えています。今年の夏、ヘルパーの大切さを痛感しました。家族が、夏休み中に体調を崩てしまい、コロナの可能性があったため、ヘルパーを雇うことをやめました。普段、搾乳はヘルパーに手伝ってもらっていましたが、そこを私や弟等家族で賄うことになりました。夏休みだったので手伝うことができましたが、普段の日だったらこんなに

---

手伝うことができずに大変なことになっていたかもしれませんと、ヘルパーのありがたみを感じました。これからもヘルパーと共に働いていくからこそ私は、雇用される側も体験しておきたいと思っています。それだけではなくヘルパーとして活動することで、他の酪農家が取り入れている先端技術を体験し、その牛舎のメリット、デメリットを発見することができます。父は、酪農ヘルパーとして10年間県南地区で活動し、地域の酪農家と繋がりを作るだけでなく、それぞれの酪農家の経営方針を学んできました。父は、「酪農家1軒1軒で、経営、搾乳、給餌のやり方が違う」と言っていました。私も大学卒業後、ヘルパーとして様々なことを体験し、自分が建てた最高の牛舎に自分で人工授精した牛を飼育して、父や祖父母から引継ぎ地元の酪農業に貢献していきたいです。